

藤原有家の六百番歌合詠について

松 尾 漢

藤原有家は、六条修理大夫顕季を祖に持つ六条藤家の歌人である。父の重家、おじの清輔・顕昭（顕輔の猶子）、兄の経家と、有家の身近な親族にも重要な歌人が多く見られる。有家は後鳥羽院歌壇では和歌所の客人となり、六条藤家では唯一の『新古今和歌集』の撰者に選ばれている。新古今時代の代表的な歌人の研究は、俊成・定家父子を対象としたものを中心として数多くある。その中で、藤原有家研究は他の新古今歌人に比すれば立ち後れていると言わざるを得ない。近年、藤原有家の歌人研究は、西前正芳氏によって精力的に進められている。有家の個々の歌について詳細に考証し、論じるところはそれまでほとんどなされていないが、氏の研究により、有家の詠風が如何なるものであるかが次第に明らかにされてきたといえる。

本稿では、建久期に他された『六百番歌合』での有家詠に注目したい。建久四年初頭の時点で、有家は三十九歳、従四位上

になっていた⁽¹⁾。それまでの有家の歌人としての活動は、西前氏が明らかにされたように、『文治二年十月二十一日太宰権帥経房御歌合』・『花月百首』・『建久二年三月三日若宮社歌合』などに出詠していたことがわかっている。また、有家の歌は、『六百番歌合』以前に成立したと考えられる勅撰集の『千載和歌集』や私撰集の『月詣和歌集』・『玄玉和歌集』にとられている。おそらく、他の歌人と同様か少し遅い時期には、すでに有家も和歌を詠むようになっていたと想像される。本稿では有家の現存する和歌の中で比較的まとまった数量の歌が残っている最も早い時期の詠歌群ということで、『六百番歌合』の有家詠を考察していきたい。

『左大将家百首歌合』、いわゆる『六百番歌合』は、九条良経によって建久年間に催された歌合である。この歌合からの『新古今和歌集』入集歌数は三十四首。これは、『千五百番歌合』・『正治二年初度百首』に次いで撰集資料中では三番目に多い数で、後鳥羽院歌壇が形成される以前の歌合・歌合などの中では最多である。新旧の詠風が様々な形であらわれ、左右の方人によって激し

い難陳のやりとりがおこなわれた。いわゆる「難義」を積極的に取り込んだ歌に対しても、多くの議論がされている。良経による計らいか、この歌合に出詠した歌人の数は、定家・家隆を中心とした御子左家系の歌人と季経・経家を中心とした六条藤家系の歌人とがほぼ同数になるように配慮されている。

有家が六条藤家系の歌人として、『六百番歌合』に出詠した経緯には、いくつかの理由が考えられる。清輔・重家亡きあと、六条藤家系歌人の代表的歌人と目されていた季経・経家や、『古今集注』・『拾遺集注』・『袖中抄』などを著して当代歌人から歌学に通じた人物として認識されていた頭昭の『六百番歌合』出詠は、当時の歌人評価としてはごく自然なものである。これに六条藤家系歌人からもう一人歌人を選ぶとするならば、年齢・官位・歌人としての経歴などを考えると、同じ重家の子である顕家や保季(季経の猶子となる)が出詠歌人の候補として上がってくると思われる。

有家より十六歳年少の保季は、建久四年の時点で二十三歳、正五位下左馬権頭であった。保季は、歌人としての経歴が豊富であったとは言えず、主だった歌合・歌合への出詠は確認できない。⁽⁶⁾『千載集』・『月詣集』・『玄玉集』などの撰集にも歌は採られておらず、保季は、歌人としての経歴という点で有家に劣ると考えられることが出来る。

これに対し、有家より四歳年長の顕家は、出詠歌人としての条

件を十分に備えていると考えられる。建久四年の時点で、四十三歳・正四位下左京大夫であった顕家は、『嘉応元年十一月二十一日撰政基房家歌合』・『安元元年閏九月十七日兼実家歌合』・『治承二年三月十五日別雷社歌合』等の参加が確認でき、有家よりも早い時期に歌会等に出詠していることがわかる。勅撰集・私撰集への入集状況は、有家が『千載集』一首『月詣集』二首『玄玉集』四首の入集に対し、顕家は『千載集』三首『月詣集』八首『玄玉集』一首の入集というものである。つまり、『六百番歌合』の段階では、有家よりもむしろ顕家の方が歌人としての評価が高かった可能性があると考えられる。このような状況で、顕家ではなく有家が出詠した理由は、歌合の主権者である良経との関係によるものが大きいと思われる。井上宗雄氏が指摘されているように、顕家は松殿関白基房家や近衛家に入りをしている。これに対し、有家は、『六百番歌合』以前から九条家の家司として出入りをし、良通・良経主催の詩会にたびたび参加をしていた。⁽⁸⁾また、有家の若年の頃の歌合・歌合出詠はごく限られたものであったが、先に述べたようにすでに勅撰歌人の仲間入りを果たしている。このことから、『六百番歌合』の主権者である良経から、有家は和漢兼作の歌人として認識されていたと想像される。

良経との関係⁽⁹⁾を考えると、有家の『花月百首』への参加も大きな要因の一つであると思われる。有家は、『花月百首』に六条藤家歌人としてただ一人出詠を果たしている。『花月百首』の詠歌

が現存しないため、有家がどういった歌を詠んだのがわからな
いが、そこの詠歌が良縁に評価されたという想像が許されるな
ら、有家の『花月百首』への参加は『六百番歌合』の出詠に大き
く関与していると考えることができる。このような理由で、顕家
ではなく、有家が『六百番歌合』に出詠をしたのであろう。

以下、本稿では、藤原有家の六百番歌合詠と、先行和歌との関
わりについて注目をしていきたい。新古今時代には、先行古典と
の関係を積極的に意識化した手法として本歌取が注目された。本
稿ではのちに藤原定家によって定められた本歌取の概念⁽¹⁰⁾よりも
広い意味で、先行和歌との関わりを見ていきたいと思う。つまり、
素材に対する着想や表現方法などに大きな影響を与え、歌に表現
された世界に関連性を認めることの出来る先行詠に注目をして、
有家詠との関係を見て行きたい。

二

『六百番歌合』における有家詠の第一の特徴は、古今和歌集歌
の尊重が挙げられる。有家の『古今集』⁽¹¹⁾の尊重の態度については、
すでに西前氏によって指摘されている。六百番歌合詠に注目す
ると、有家の『古今集』の尊重の傾向は、特に恋題の歌に顕著に現
れていると考えられる。以下、古今集歌が有家詠に影響を与えた
と考えられるものを見ていきたい。⁽¹²⁾

すでに、久保田淳・山口明穂両氏により新日本古典文学大系六

百番歌合』(以下、『新大系』と略す)が刊行され、本歌等の指摘
がされている。本稿では、『新大系』で影響関係が指摘されてい
る先行詠も挙げることにした。(『新大系』で指摘されているもの
には括弧内に※を付した)有家の六百番歌合詠に冠したアラビア
数字は、『六百番歌合』の有家詠を題の配列に従って巻頭から数
えた時の通し番号で、括弧内はその歌の題と勝敗である。

12 花散れば道やはよけぬ志賀の山うたて木ずゑを越ゆる春風

(志賀山越・負)

滋賀の山越えに、女の多く遭へりけるに、よみて、遣はし
ける

梓弓春の山辺をこえくれば道もさりあへず花ぞちりける

(古今和歌集・春歌下115・紀貫之)

53 名に立てる音羽の流も音にのみ聞くより袖の濡る、物かは

(聞恋・勝)

山科のおとはの流のおとにだに人のしるべくわがこひめやも

(※古今和歌集・墨滅歌1109・近江采女)

59 果てもなく行方も更知らざりし恋の限りは今宵也けり

(遇恋・持)

わが恋はゆくゑもしらずはてもなし逢ふを限と思許ぞ

(※古今和歌集・恋歌二611・凡河内躬恒)

ねられぬをしひてねてみる春の夜の夢の限りはこよひなりけ
り (貫之集656)

61 袖の上にかゝる涙の白玉を包まねば、「そよそに散るらめ

(顕恋・持)

つ、めども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬめの涙なりけり

66 つれなさの類までやはつらからぬ月をも愛でじ有明の空

(暁恋・負)

啓明のつれなく見えし別より暁許うき物はなし

70 寢覚まで猶苦しきは行帰り足も休めぬ夢の通ひ路

(夜恋・持)

ゆめぢには足もやすめず通へども現にひとめ見しごととはあらず

71 逢見ても身にやは年の積るべき我老いらくになしと答ふな

(老恋・持)

老いらくの来むとしりせば門さしてなしと答へて逢はざらまし

78 さらにだに恨みんと思ふ我妹子が衣の裾に秋風ぞ吹く

(奇風恋・勝)

わがせこが衣のすそを吹返しうらめづらしき秋のはつかぜ

81 我恋に深さくらべば外山哉吉野の奥の岩のかけ道

(寄山恋・負)

世にふれば憂さこそまされみ吉野の岩のかけ道ふみならしてむ

(古今和歌集・雑歌下951・詠人不知)

82 わたの原沖つ潮風に立つ波の寄り来やかゝる汀なりとも

(寄海恋・持)

わたの原寄せる浪のしばくも見まくのほしき玉津島かも

(※古今和歌集・雑歌上912・詠人不知)

99 我恋はしげきみ山の山人のさすがにえしもこりはてぬ哉

(寄樵夫恋・持)

わが恋は深山がくれの草なれやしげさまされどしる人のなき

(古今和歌集・恋歌二560・小野良樹)

59 「果てもなく」の下の句に關しては、『貫之集』の歌の影響が考えられるが、『新大系』が指摘するように躬恒の歌「我が恋は」が本歌であると考えてよい。古今集歌からの影響を見ていくと、恋題の歌の本歌に恋・雑の歌を用いていることが明らかである。

その際、安易と思われるほど無造作に古今和歌集歌の表現を用いている。59「果てもなく」66「つれなさの」70「寢覚まで」の三首は、難陳や判詞で本歌を指摘されている。「六百番歌合」に參加した歌人達にとって、有家詠の本歌取は明解で単純なものであったことが伺える。

『六百番歌合』の特徴の一つとも言える細分化された恋題は、

出詠者を悩ませるものであったと考えられる。次第に恋題の比重が上ってきていた時期とはいえ、それまでは歌合・定数歌の組

題で恋題は多くはなかった。四季題のように歌の細分化・類型化が進んでいなかったため、歌合や歌会における恋題の題詠歌の先行詠が豊富であったとはいえない。恋題の題詠は『六百番歌合』の題に対応するほどの細分化・類型化にまで発達していなかったと思われる。必ずしも歌会・歌合への出詠歴が豊富であったとはいえない有家は、細分化された『六百番歌合』の恋題を詠む際、恋の萌芽から終焉までの経緯や様々な様相を目にすることが出来る古典作品として『古今集』の恋部の歌に注目したと考えられる。有家は、恋歌の表現の類型として認識されていた『古今集』の歌を本歌取することによって、『六百番歌合』での詠歌を作っていたのである。

古今集歌を本歌取したと思われる有家詠は、判者の俊成から良い評価を受けているとはいえない。53「名に立てる」の歌は、判に「右歌、有病之由、左方申之。然者、左勝るべきにや侍らん。」とあり、右歌に番えられた慈円の歌に歌病があったため勝を得ていれるものである。また、判詞を挙げることはしないが61「袖の上」に・71「逢見ても」・82「わたの原」・99「我恋は」の各々の歌も、番われた歌の出来があまり良くなかったために得た持の判定である。

わずかに70「寝覚まで」78「さらでだに」などは『古今集』の本歌取の成功例として考えることが出来る。70「寝覚まで」の歌は、「かの小町が足も休めず通へどもといへる歌の心をとりて、

寝覚めまで猶苦しきはいへる、巧みに見え侍。」とされ、歌に詠まれた世界が本歌世界だけにとどまらず、新しい意味を付与しているところを俊成に評価されている。78「さらでだに」の歌は、後に『新古今和歌集』に採られた歌(恋歌四1305)である。右方から「頗有感気」と評され、俊成も判詞でこの右方の評価を受け「不及沙汰歟。以左為勝。」とし勝を得ている。

だが、古今集歌を本歌取したと考えられる有家詠の多くは、単純に先行古典の言葉を取って主題を変えないという、稚拙ともいえる本歌取であった。そのような有家詠が、俊成の評価を勝ち得ることは出来なかった。そのような有家詠が、俊成の評価を勝ち得ることは出来なかった。俊成の目には、俊成及び御子左家系の歌人が意識的に実践してきた本歌取と、有家が『古今集』入集歌を用いておこなった本歌取の間に、明らかな相違が映ったのである。

三

『六百番歌合』における有家詠の第二の特徴は、いわゆる「難養」に対しての興味が多いことである。周知の通り六条藤家は、歌学に対して高い関心と豊富な知識があったと考えられる。六条藤家には、清輔が著した『袋草紙』・『奥義抄』などの歌学書が残されていた。また、『六百番歌合』が催される数年前の文治年間には、頭昭歌学の集大成といえる「袖中抄」も完成されている。『六百番歌合』の催された頃は、九条家を中心とし

た歌壇の主導権がすでに御子左家に移りつつあった時である。清輔・重家亡き後、六条藤家系歌人の代表者であった季経・経家が歌合や歌会に参加をして御子左家に対抗をしていたが、顕輔や清輔が活躍していた頃の勢いはすでに失せていた。そのような状況下で、六条藤家系歌人達にとって、歌学的知識が豊富であるという自負は歌に携わるときの精神的支柱であったと思われる。『六百番歌合』の難陳でのやりとりや、『顕昭陳状』を記した顕昭の態度からもそのことがはっきりとわかる。六条藤家系の歌人として『六百番歌合』に出詠した有家の詠歌に、歌学的な興味を見ることが出来るものを以下に挙げてみた。

15 うら若き弥生の野辺のさいたづま春は末ばに成にける哉

(残春・負)

のべみればやよひの月のはつかまでまだうらわかきさいたづまかな
(※後拾遺和歌集・春下149・藤原義孝)

42 白菊も紫深く成にけり秋と冬とに色や分らん (残菊・勝)
いつのまにむらさきふかくなりぬらんはつしもばかりおけるしらぎく
(康平六年丹後守公基朝臣歌合5)

49 伎倍人のまだら衾は板間より霜置く夜半の名にこそ有けれ
(衾・持)

伎倍比等乃万太良夫須磨尔和多佐波太伊利奈麻之母乃伊毛我平村許尔

(※万葉集・卷十四3354・東歌・相聞・遠江国歌)

58 更けにけり頼めぬ鐘は音信て七編さびしき十編の菅薦

(待恋・勝)

みちのくのとふのすがこもななふには君をねさせてわれみふにねん(※夫木和歌抄・雑歌十13475・題不知・詠人不知)

83 最上河人の心の稲舟もしばしばかりと聞かば頼まん

(寄河恋・負)

最上河のほれば下る稲舟のいなにはあらずこの月ばかり

89 唐国の虎臥す野辺に入るよりもまどふ恋路の末ぞあやうき

(寄恋・勝)

有りとてもいく世かはふるからくにのとらふすのべに身をもなげてん
(※拾遺和歌集・雜恋1227・藤原国用)

人妻はもりかやしろかからくにのとらふすのべかねてころみん
(※古今和歌六帖・第五2978・人づま)

90 唐国のとらふす野辺ににほふとも花のしたはねても帰らん
さりともと待べき程の情かは人頼めなる蜘蛛のふるまる
(清輔集36)

(寄虫恋・負)

わが背子が来べきよひ也さ、がにの蜘蛛の振舞ひかねてしるしも
(※古今和歌集・墨減歌1110・詠人不知)

58 『更けにけり』の歌は、『新大系』の指摘するとおり『夫木

和歌抄』の歌が大きな影響を与えていると思われるが、『夫木抄』の成立は『六百番歌合』よりも後のことである。この『夫木抄』の歌は、『俊頼髓腦』に「心ざしを見せむと詠める歌」としてすでに挙げられ、他にも『綺語抄』・『和歌童蒙抄』などの歌学書に取り上げられている。有家はこれらの歌学書所載の内容から影響を受けたと考えられる。『綺語抄』器物部には、「十編の菅薦」という語の解説として、「とふのすがこもとは、こもをとふしまでこめてあみたるなり。ひろくせんとしてしたる也。(略)又云、とふのこほりといふ所におふるこものとふしあるなり。」と記されている。また、『和歌童蒙抄』「薦」には、「彼國にとふの郡といふ所のあれば、それにつきてとふのすがこもとよみて、やがてとふのとをあるに取なせるとぞ聞えたる。たゞとふある薦といはゞ、みちのくにかならず有べしとみえたる事なし。」と記されている。「十編の菅薦」が如何なるものであるかということ、その名称の由来が『綺語抄』・『和歌童蒙抄』の興味の対象であったことがわかる。これらの先行歌学書の内容を受けて、顕昭の『袖中抄』は、「是は人をおもふ心にて、七ふには君をねさせ、みふには我ねんと譲る也。其を童蒙抄綺語抄などに、みちのくに、とふの郡より十あみたる薦の由来由と云り。心得られず。」と記している。『袖中抄』は、『綺語抄』や『和歌童蒙抄』に記されている「十編の菅薦」地名由来説を否定している。

この有家詠の下の句は、共寝をしようとして相手のために菅薦

の七編の部分空けて自らは三編に寝ているのに、空けている七編のところに寝る人がいないと詠んでいる。これは、『袖中抄』が説く「みちのくの」の古歌の解釈の内容に対応していると考えられる。

同じように、83「最上河」は、最上河の「いなふね」という言葉に対しての興味を伺うことができる。この歌は、『新大系』が指摘するように、『古今集』の東歌が本歌であると考えられる。

この歌は、『俊頼髓腦』・『綺語抄』・『和歌童蒙抄』などの歌学書にも挙げられている。『俊頼髓腦』には、「此歌は出雲の國にある川なり。殊の外にはやき河にて四五日ばかりにのぼるなる川をくだれば、唯ひと時に下る。さればのほりさまにはかしらをふりてのほりがたければ、いなふねとは申すにや。稲つみたるふねをいふぞなど申す人もあるにや。」と記されている。『綺語抄』では、「もがみ川は、出羽國のたちのまへよりながれたる河也。それにたちへもいくに、かはのあまりはやくて、かまへてさしのほりたればかくよめるなり。」と記され、『和歌童蒙抄』では、「古今廿に有。此川出羽國のたちの前に流れたり。それよりこほりく、の稲を舟につみてのぼるに、川早くしてのほりては下りくとして終にのほりぬ。さればかくよめり。又云、川のはやくてのぼる舟のかしらをふるを、いなふねといふ也と云々。」と記されている。最上河の所在、「いなふね」という名前の由来などが興味の対象であったようだ。これらの歌学書の内容を受けて、清輔の『奥義

抄」や顕昭の『袖中抄』が、自らの説を書き記している。『奥義抄』は、「もがみ川はたぐひなくはやくてのほるふねのかしらをふりてくだりくすれば、いな舟とはいふ也。遂にはのほりぬればしばばかりぞとはよめり。或物に云、出羽國の住人の申し、は、彼河はすべてはやり事なし。たゞくらまのな、まがりの坂のやうにてひぢまがりて流れたれば、のほり舟の又くだるやうによそにては見ゆる也と申せども、後撰にも、もがみ川ふかきにあへずいな舟の心かるくもかへりけるかなとよめり。是はさきの歌の心にてぞはべる。川はさだめなきものなればむかしこそはやくはべりけめ。」と、「いなふね」の名前の由来について考証をおこなっている。『袖中抄』は、「いなふねとはいねつみたる舟を云也。もがみ河は出羽國に最上郡あり。その郡よりながれたれば、もがみ河と云也。(略)郡々のいな舟多かれはのほりくだる事数しらねば、のほればくだるとは云、いなとはいはん料にいな舟とは云也。(略)もがみ河のきはめてはやくて、のほるとすれど又くだる也と云は、古き義なれと云れず。(略)又いな船と云も河の早くて舟のかしらをふればいな舟と云など申すめり、見ぐるしき事也。(後略)」とし、この記事以降に、それまでの歌学書に挙げられている説に対して様々な例を挙げて詳細に考証をおこなっている部分が見られる。『古今集』の当該歌は、院政期の歌学の担い手に注目される歌であったようだ。『袖中抄』等に見られるような「いなふね」の語に対する興味を示す記事が、有家の古今集の当該歌の撰取を

促したと考えられる。

この古今集歌の結句に注目をしてみたい。『古今集』の諸本は、志香須賀本・毘沙門堂註本のみ「しばしばかりぞ」となっていて、六条家系統の諸本をはじめとして「この月ばかり」を示すものがほとんどである。一方、『俊賴髓腦』・『綺語抄』では、この古今集歌の第五句は「しばしばかりぞ」となっていて、『古今集』の大多数の写本では見られない歌の形で書かれている。さらに、『奥義抄』には「此歌普通にはしばしばかりぞとはべる」と記され、『袖中抄』には「このつきばかりといはむあまりにひさし、しばしばかりはと云は證本の説にはあらず。」と記されている。六条藤家の歌学の立場からは、この歌の結句は「この月ばかり」が正しい形として考えられていたと思われるが、これらの歌学書の記事によれば院政期にはこの「しばしばかりぞ」の異文の形でも歌が流布していたと考えることが出来る。

「いなふね」を詠んだ古今集歌は、院政期にしばしば本歌取の対象となつたと考えられる。有家詠に先行する和歌として、「もがみ川瀬瀬にせかるいな舟のしばしぞとだに思はましかば」(長秋詠藻188・述懐百首)「もがみ川なべてひくらんいなぶねのしばしが程はいかりおろさん」(山家集1163)などが挙げられる。この古今集歌を本歌とする場合、第五句が「しばしばかりぞ」の『俊賴髓腦』や『綺語抄』に取られている形を本歌にすることがあったことがわかる。有家は、自らの歌を作るとき、この

ような同時代の先行詠の影響から「しばしばかりぞ」の形の方の歌を意識した可能性がある。

このように、有家の歌学に対する知識は、基本的には、『袋草紙』・『奥義抄』・『袖中抄』など六条藤家の歌学書の記事によるものが大きい。六条藤家のものだけでなくそれまでの歌学書に記載されている歌学的なもの全般に向けられていると思われる。

42 「白菊も」の歌は、俊成により「左歌優に待るべし」と評価されて勝を得ている歌である。秋から冬にかけて季節が深まると共に菊の色が移ろいゆく様を知的な趣向で詠んだ歌は『古今集』の頃から多く詠まれてはいるが、この歌の二三句の言葉統きは『丹後守公基朝臣歌合』で詠まれた「いつのまに」の歌から強い影響を受けていると思われる。『丹後守公基朝臣歌合』は康平六年（一〇六三）に藤原公基が任国の丹後で開催し、藤原範永が判者をつとめた歌合である。歌合の名は、『和歌童叢抄』にすでに見られる。しかし、当該歌は勅撰集にも私撰集にもとられることはなく、一般的によく知られた歌であったとは考えにくい。

この歌の享受にも六条藤家の歌学書が介在していると考えられる。『袋草紙』には、古今の歌合を記した「古今の歌合の難」のところにも、この歌の番と範永の判詞を載せている。「歌合の歌にしつべし。なだらかなり」という部分を引いていて、潜補のこの歌に対する評価がわかる。『二十卷本類従歌合』にこの歌合が採録されているため、有家が歌合の証本を目にした可能性も否定す

ることは出来ないが、『袋草紙』を經由してこの歌が有家に享受されたと考えの方が自然である。

49 「伎倭人の」の歌は、『新大系』が指摘するように、『万葉集』巻十四の東歌を本歌にしていると思われる。この歌は、『類聚古集』巻十六に見ることが出来るが、勅撰集・私撰集などにとられることはなく、また、歌学書類にも引かれることはなかった。有家詠以前に、この万葉集歌を本歌にしたと考えられるものもなく、それまで注目されることがほとんど無かった歌である。『六百番歌合』の有家詠に於いて、『万葉集』所収歌を明確に本歌にしたと考えられる歌はこれ以外には見あたらない。しかし、わずかに一首ではあるが、この有家詠を見ると万葉集歌に対する興味・関心が有家にあったことがよくわかる。有家は「衾」題の歌を詠む際、それまでの歌人がほとんど興味を示さなかった万葉集歌を想起して歌を詠んだのである。この有家詠は、有家の万葉集に対する興味と、「伎倭人の斑衾」という言葉に対する歌学的興味の一致により詠まれたと考えられる。これまでに見てきたような六条藤家の歌学書の介在は、この歌では認められない。有家は歌学書を經由せずに別の形で万葉集歌を享受していると思われる。有家の万葉集歌及び歌学的なものに対する積極的な関心を見ることが出来る詠歌である。

詳しく述べることはしないが、15「うら若き」89「唐國の」90「ざりとて」の各歌も、有家の歌学的興味を知ることのできる

ものである。15「うら若き」の歌に用いられている、「さいたづま」は『後拾遺集』の「のべみれば」の歌に用いられた言葉で、『和歌童蒙抄』・『綺語抄』・『袖中抄』・『後拾遺抄注』に解釈が記されている。89「唐國」の歌に用いられた「唐國の虎臥す野辺」も『拾遺集』の「ありとて」の歌に用いられた言葉で、『和歌童蒙抄』・『拾遺抄注』に解釈が記されている。また、90「ざりとも」との歌に用いられている「蜘蛛のふるまる」は『古今集』『愚滅歌』にある「わが背子が」の歌に用いられている言葉で、『俊頼髓』・『和歌童蒙抄』・『奥義抄』・『古今集注』に解釈が載せられている。

このように、『六百番歌合』の有家詠を考察してゆくと、そこには西前氏が指摘する『古今和歌集』重視の姿勢や、従来から指摘されているような御子左家的詠風への接近⁽¹⁵⁾だけではなく、六条家の歌人に見られる歌学的なものに対する興味を伺うことができる。その中には『奥義抄』・『袖中抄』などの六条家歌学書で論じられている内容が有家の詠歌に反映されていることが認められる。六百番歌合詠に限らず、歌学に対する興味を考察することは、有家の詠歌を見ていくにあたって留意すべき事柄である。

四

藤原有家の六百番歌合における詠歌と先行詠との関係に重点を置いて考察を行ってきた。そこでの有家詠には以下のような特徴

を見ることができると見られる。

①恋題における古今和歌集歌の重視

②院政期歌学書に見られる、難義に対する興味

③万葉集に対する関心

①の古今集歌の重視は、細分化された恋題に対応するために、出詠歴が豊富とは言えなかつた有家が選択した方法であつたと考えられる。②は六条藤家の歌人としての有家の意識が反映されていると考えられる。有家は、自らの家で生み出されていた清輔・顕昭の歌学書の説などを受容し、自らの詠作に利用していったと考えられる。その中には、わずか一首ではあるが、③のように万葉集に積極的な関心を示した歌を見ることが出来る。六条藤家系歌人としての意識が、有家の六百番歌合詠にあらわれているといえる。

この他に、『六百番歌合』の有家詠の中には、御子左家的詠風に近い詠風で詠まれた歌を見ることが出来るが、その考察は改めて別の機会におこないたいと考えている。

注

(1) 茶田智子「藤原有家論」(『大谷女子大國文』八号 昭和五三・

三)、鈴木徳男「藤原有家の和歌」(『中世文学論稿』七号 昭和五六・二)等の諸論がある。

(2) 西前正芳「藤原有家の和歌活動をめぐって——とくに歌風の形成の契機を視点として——」(『語文』第五三輯・日本大学国文

- 学会 昭和五七・一)、「藤原有家伝に関する基礎的諸問題」(古典論叢) 14 昭和五九・九)、「藤原有家考—和歌拾遺—」研究紀要・日本大学人文科学研究所 昭和五八・三)、「藤原有家和歌—御室五十首を中心として」(語文) 第九九輯・日本大学国文学会 平成九・一二)、「藤原有家和歌—旧風から新風へ」(和歌文学の伝統) 平成九・八) 等。
- (3) 久保田淳「新古今歌人の研究」(東京大学出版会・昭和四八)第二章第三節五にそれまでの峯岸森秋氏・松野陽一氏・谷山茂氏の諸先学の説を挙げている。いずれにしても、建久五年以前には成立していたと考えられる。
- (4) 本稿で記した官職は「公卿補任」に拠る。
- (5) 前掲(2)「藤原有家の和歌活動をめぐって—とくに歌風の形成の契機を視点として—」参照
- (6) 保季・顕家の歌合歌会等出詠状況は、前掲(5)及び「平安朝歌合大成」索引・「藤平春男著作集」第一巻付録に拠る。
- (7) 井上宗雄「鎌倉時代歌人伝の研究」(平成九・風間書房)
- (8) 前掲(5) 参照
- (9) 久保田淳「中世和歌史の研究」、『六百番歌合』を讀む(平成五・明治書院)に、『六百番歌合』の計画を李経・有家あたりが良経に働きかけたと考えられると指摘されている。
- (10) 「近代秀歌」・「詠歌大概」・「毎月抄」などに詳しく述べられている。
- (11) 前掲(2)「藤原有家の和歌—『御室五十首』を中心として」参照。
- (12) 本稿の「六百番歌合」と「古今和歌集」の本文は新日本古典文

学大系に、それ以外の和歌は「新編国歌大観」の本文に拠った。括弧内に付したアラビア数字は「新編国歌大観」番号である。

(13) 小町谷照彦「古今和歌集と歌ことば表現」(平成六・岩波書店)第一章第二節参照

(14) 再撰本「袖中抄」の成立を「袖中抄」の完成と見る。

(15) 万葉集の歌番号は、通例により「国歌大観」番号を用いた。

(16) 本稿で用いる「俊頼髓腦」・「綺語抄」・「和歌童蒙抄」・「袋草紙」・「奥義抄」・「袖中抄」の各本文は「日本歌学大系」に拠る。

(17) 「和歌童蒙抄」の本文では、第五句「この月ばかり」(「日本歌学大系」となっている。

(18) 萩谷朴「平安朝歌合大成」四に拠る。

(19) 谷山茂「新古今時代の歌合と歌壇」第二章七節(谷山茂著作集四・昭和五八)等。

(まつお かん 岡山大学大学院修士課程一年)

研究室受贈図書雑誌目録(一)

雑誌・紀要

愛知教育大学大学院国語研究(愛知教育大学大学院国語教育専攻)

愛知教育大学国語国文学報(愛知教育大学国語国文学研究室)

七

五七

愛知淑徳大学国語国文(愛知淑徳大学国文学会) 二二

愛知大学国文学(愛知大学国文学会) 三三八